

長岡京左京二条四坊五・十二町跡

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告
二〇一四―五

長岡京左京二条四坊五・十二町跡

2014年

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

公益財団法人
京都市埋蔵文化財研究所

長岡京左京二条四坊五・十二町跡

2014年

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序 文

京都市内には、いにしへの都平安京をはじめとして、数多くの埋蔵文化財包蔵地（遺跡）が点在しています。平安京以前にさかのぼる遺跡及び平安京建都以来、今日に至るまで営々と生活が営まれ、各時代の生活跡が連綿と重なりあっています。このように地中に埋もれた埋蔵文化財（遺跡）は、過去の京都の姿をうかびあがらせてくれます。

公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、遺跡の発掘調査をとおして京都の歴史の解明に取り組んでいます。その調査成果を市民の皆様に広く公開し、活用していただけるよう努めていくことが責務と考えています。現地説明会の開催、写真展や遺跡めぐり、京都市考古資料館での展示公開、小中学校での出前授業、ホームページでの情報公開などを積極的に進めているところです。

このたび、工場建設工事に伴う長岡京跡の発掘調査について調査成果を報告いたします。本報告の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示賜りますようお願い申し上げます。

末尾になりましたが、当調査に際しまして多くのご協力とご支援を賜りました多くの関係各位に厚く感謝し、御礼を申し上げます。

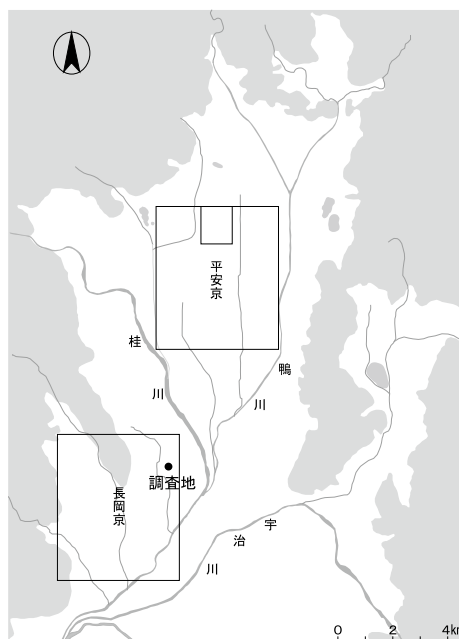
平成26年12月

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
所 長 井 上 満 郎

例 言

- 1 遺 跡 名 長岡京跡（文化財保護課番号 14NG200）
長岡京左京572次調査（7NWHD - 1地区）
- 2 調査所在地 京都市伏見区久我西出町1 - 28他地内
- 3 委 託 者 ナカライテスク株式会社 代表取締役 半井隆利
- 4 調査期間 2014年8月4日～2014年9月10日
- 5 調査面積 約350㎡
- 6 調査担当者 布川豊治・伊藤 潔
- 7 使用地図 京都市発行の都市計画基本図（縮尺1：2,500）「久我」を参考にし、作成した。
- 8 使用測地系 世界測地系 平面直角座標系Ⅵ（ただし、単位（m）を省略した）
- 9 使用標高 T.P.：東京湾平均海面高度
- 10 使用土色名 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。
- 11 遺構番号 1区は1から、2区は201から各々通し番号を付し、遺構の種類を前に付けた。
- 12 遺物番号 通し番号を付し、写真番号も同一とした。
- 13 本書作成 布川豊治
- 14 備 考 上記以外に調査・整理ならびに本書作成には、資料業務職員および調査業務職員があたった。

（調査地点図）



目 次

1. 調査経過	1
2. 位置と環境	3
(1) 歴史的環境と立地	3
(2) 既往の調査	3
3. 遺 構	6
(1) 1区	6
1) 基本層序	6
2) 遺 構	6
(2) 2区	10
1) 基本層序	10
2) 遺 構	10
4. 遺 物	12
(1) 1区	13
1) 遺物の概要	13
2) 土器類	13
3) 瓦類	14
(2) 2区	14
1) 遺物の概要	14
5. ま と め	15

図 版 目 次

図版1 遺構	1	1区全景（東から）
	2	2区全景（西から）
図版2 遺構・遺物	1	1区流路17（北東から）
	2	1区溝15・16（北東から）
	3	1区出土遺物

挿 図 目 次

図1	調査位置図（1：2,500）	1
図2	調査区配置図（1：1,000）	2
図3	1区調査前全景（西から）	3
図4	2区調査前全景（東から）	3
図5	周辺調査位置図（1：5,000）	4
図6	1区西壁・北壁断面図（1：100）	7
図7	1区遺構平面図（1：150）	8
図8	流路17断面図（1：60）	9
図9	溝15・16、柱穴24・25実測図（1：60）	9
図10	2区北壁・東壁断面図（1：100）	10
図11	2区遺構平面図（1：150）	11
図12	土坑211実測図（1：50）	12
図13	1区出土遺物実測図（1：4）	13

表 目 次

表1	周辺調査一覧表	5
表2	遺構概要表	6
表3	遺物概要表	12

長岡京左京二条四坊五・十二町跡

1. 調査経過

調査地は、長岡京の北東部、左京二条四坊五町と十二町に推定される。当該地において工場の新築工事が計画されたため、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下「文化財保護課」という）が試掘調査を実施したところ、遺構が残存することが確認され、発掘調査を実施することとなった。調査は、文化財保護課の指導の下、公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所が担当した。調査範囲は文化財保護課の指導により、東西約210mある新設道路に2箇所、西側の五町推定地に南北4m、東西50mの調査区（1区）と、約100m東側の十二町推定地に幅5m、長さ30mの調査区（2区）を設定した。

試掘調査では、耕作土の下面で検出した地山面の上面で長岡京期の遺構などを検出した。この成果を元に、発掘調査では地山面を遺構面とし、調査区は一部に東四坊坊間小路と東四坊坊間東小路を含むと推定されることから、長岡京期の条坊側溝などの遺構を検出することを主目的とした。

調査は2014年8月4日から開始した。重機掘削で地山面まで耕作土を除去し、この面で遺構検



図1 調査位置図（1：2,500）

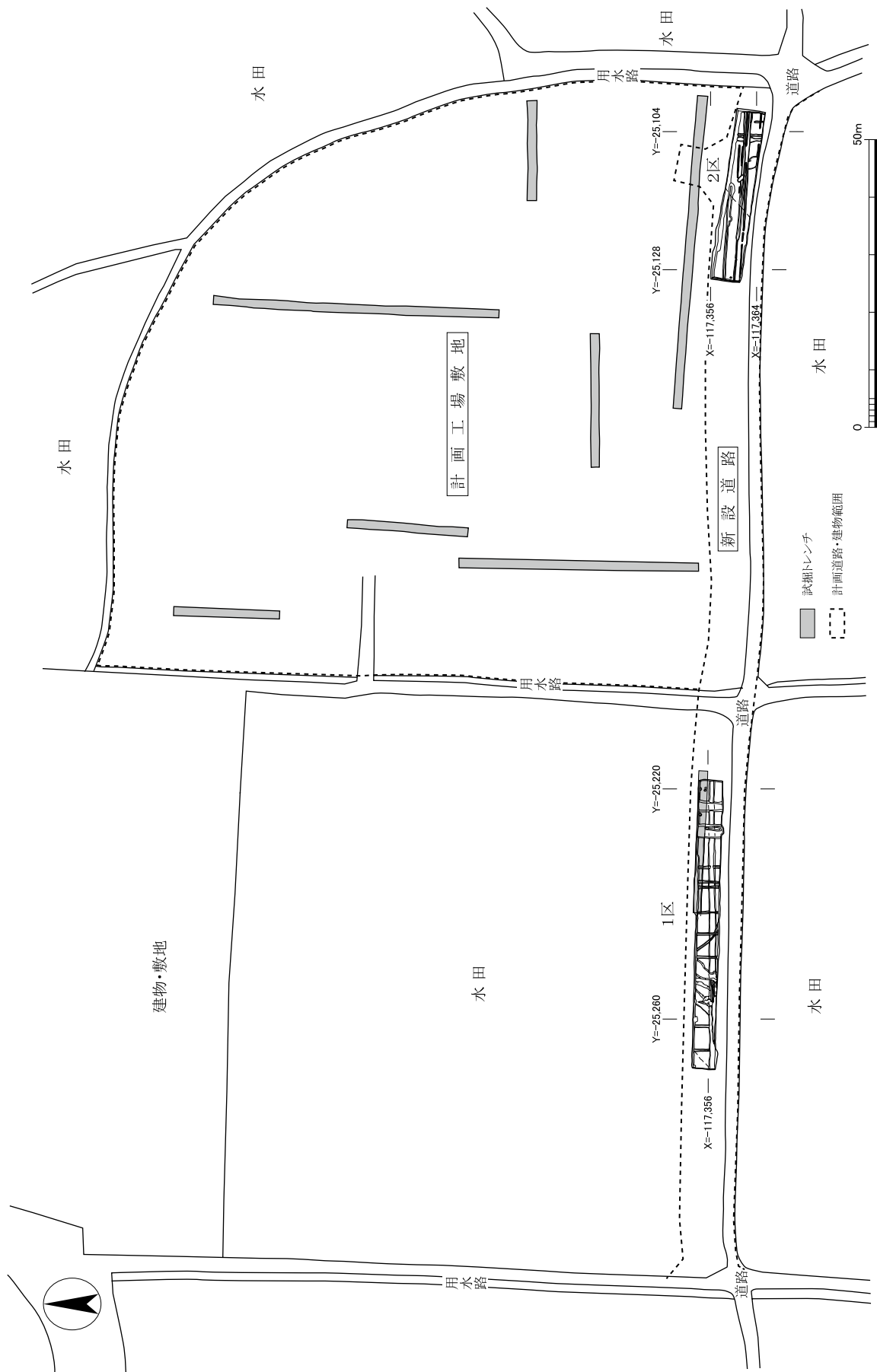


図2 調査区配置図 (1 : 1,000)

出を行った。その結果、1区では南北溝や東西溝、流路、柱穴などを検出した。2区では東西溝や南北溝、土坑などを検出した。以後、天候不順による多雨によって度々調査区が水没し、調査に支障をきたしたが、遺構掘削、写真撮影、図面作成を行い、断ち割り調査等により断面図を補足し、主な作業を終了した。次に機材搬出、埋戻し、仮フェンス撤去などを行い、9月10日にすべての現場作業を終了した。なお、調査中は適時、文化財保護課の臨検・指導を受けた。

2. 位置と環境

(1) 歴史的環境と立地

調査地は、西方に向日丘陵、東方に桂川に挟まれた低湿地である。当地域周辺には長岡京以前の遺跡が点在する。調査地北西から南西に弥生時代から古墳時代の集落跡である東土川遺跡、弥生時代を中心とする集落跡である鶏冠井遺跡、弥生時代中期を中心とする集落跡である鶏冠井清水遺跡などがある。

延暦三年(784)、桓武天皇によって都が奈良の平城京から乙訓の地に長岡京が遷都される。当地は長岡京の北東部、左京二条四坊五・十二町に推定され、1区は東四坊坊間小路、2区は東四坊坊間東小路が通る位置にある。長岡京は、延暦十三年(794)に廃都され、乙訓の地は以後、都と西国を結ぶ交通の要衝として、集落が形成されていく。また都の食料などの消費をささえる生産地としても発達していく。

(2) 既往の調査

調査地周辺は、近年、多くの工場新設や宅地開発がなされ、これに伴って発掘調査も実施された。それらの調査地点を図5に番号で示した。

調査1は名神高速道路桂川パーキングエリア建設に伴うもので、弥生時代の溝・環濠・方形周溝墓、古墳時代の溝、長岡京期の掘立柱建物・二条条間北小路・二条条間大路・東三坊大路・東四坊坊間西小路などが検出された。調査2は倉庫建設に伴うもので、縄文時代から弥生時代の流路・



図3 1区調査前全景(西から)



図4 2区調査前全景(東から)

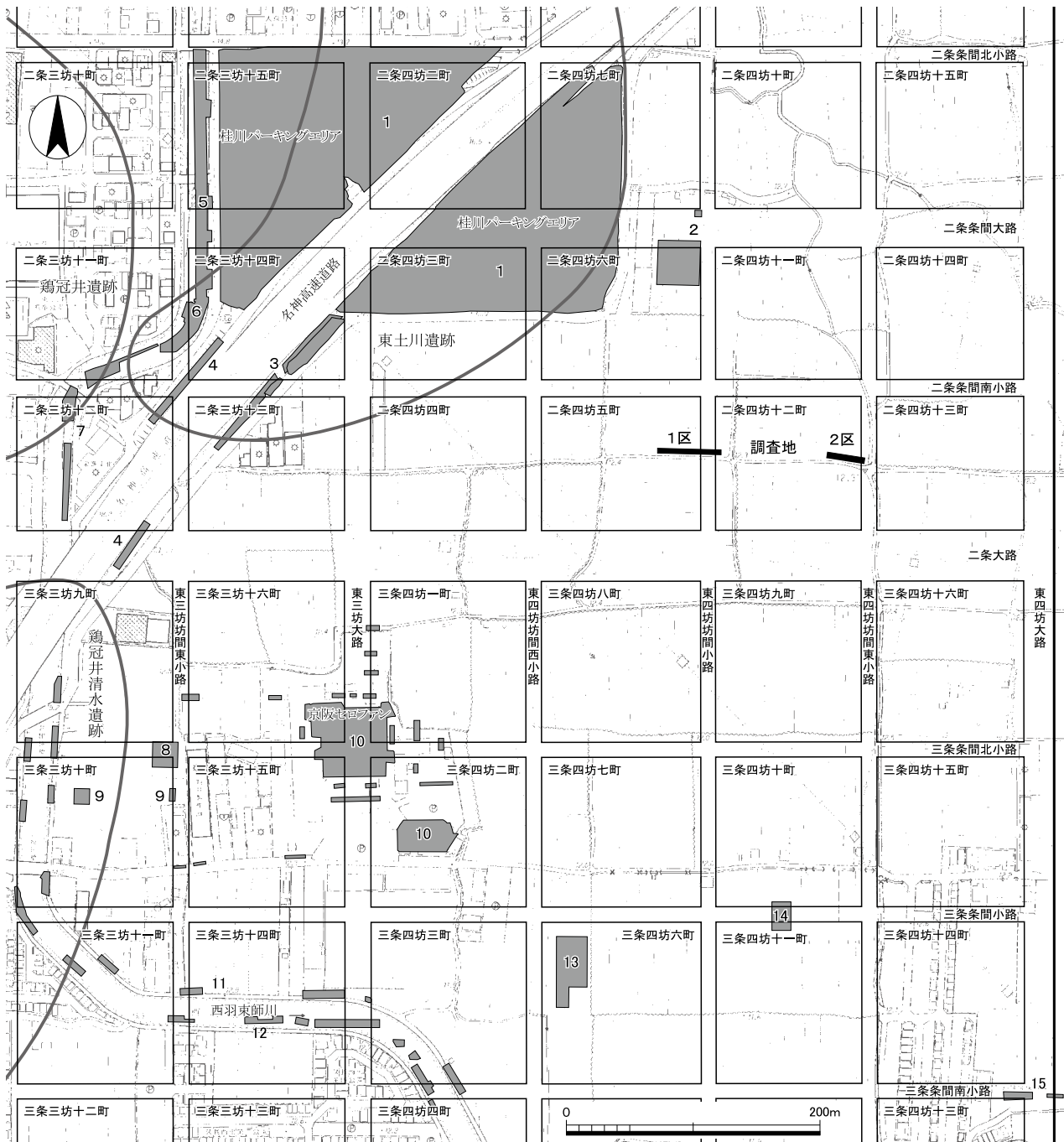


図5 周辺調査位置図 (1 : 5,000)

焼土痕・土坑、長岡京期の掘立柱建物・二条条間大路などが検出された。調査3は名神高速道路拡幅に伴うもので、縄文時代の焼土痕・土坑・流路、弥生時代の溝・水田・方形周溝墓、古墳時代の溝・河川、長岡京期の掘立柱建物などが検出された。調査4は名神高速道路拡幅に伴うもので、長岡京期の掘立柱建物・二条大路・二条条間小路・東三坊坊間東小路などが検出された。調査5は河川改修に伴うもので、弥生時代から古墳時代の沼状遺構・溝、長岡京期の掘立柱建物・二条条間北小路・二条条間大路などが検出され、二条条間北小路北・南側溝から人面土器・斎串などが出土した。調査6は河川改修に伴うもので、縄文時代の流路、弥生時代の方形周溝墓、古墳時代の溝、弥生時代から古墳時代の湿地、長岡京期の東三坊坊間小路などが検出された。調査7は河川改修に

表1 周辺調査一覧表

調査番号	調査位置 (長岡京左京)	調査年	文 献
1	二条三・四坊	1993～1997年	「長岡京跡左京二条三・四坊 東土川遺跡」『京都府遺跡調査報告書』第28冊 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター 2000年
2	二条四坊六・七町	2008年	加納敬二・津々池惣一『長岡京左京二条四坊六・七町』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2008-13 財団法人京都府埋蔵文化財研究所 2009年
3	二条三坊 十三・十四町	1994～1995年	「名神高速道路関係遺跡」『京都府遺跡調査概報』第61冊 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター 1995年
4	二条三坊 十二・十四町	1991年	「名神高速道路関係遺跡」『京都府遺跡調査概報』第51冊 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター 1992年
5	二条三坊十五町	1985年	久世康博・上村和直「長岡京左京一条三坊・二条三坊」『昭和60年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1988年
6	二条三坊 十一・十四町	1986年	丸川義広・上村和直「長岡京左京一条三坊・二条三坊」『昭和61年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1989年
7	二条三坊 十一・十二町	1986年	百瀬正恒・丸川義広・長宗繁一「長岡京左京二条三坊」『昭和62年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人 京都市埋蔵文化財研究所 1991年
8	三条三坊十町	2012年	辻 裕司『長岡京左京三条三坊十町跡・鶏冠井清水遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2012-19 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2013年
9	三条三坊十町	2014年	東 洋一ほか『長岡京左京三条三坊十町跡・鶏冠井清水遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2014-3 公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2014年
10	三条十五・十六町、 四坊一・二町	1985年	鈴木廣司・長宗繁一「長岡京左京二条三・四坊」『昭和60年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1988年
11	三条三坊十・十一・ 十四町、四坊三町	1985年	鈴木廣司・長宗繁一「長岡京左京二・三条三・四坊」『昭和59年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1987年
12	三条三坊十・十一・ 十四町、四坊三町	1985年	鈴木廣司・長宗繁一「左京三条三・四坊」『昭和58年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1984年
13	三条四坊六町	2013年	小松武彦・モンペティ恭代・辻 裕司『長岡京左京三条四坊六町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2013-3 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2013年
14	三条四坊 十・十一町	2008年	布川豊治『長岡京左京三条四坊十・十一町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2008-16 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2009年
15	三条四坊十三町	2006年	吉村正親『長岡京左京三条四坊十三町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2006-17 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2007年

伴うもので、長岡京期の二条条間南小路に比定される溝が2条検出された。調査8は工場建設に伴うもので、長岡京期の東三坊坊間東小路・三条条間北小路などが検出された。調査9は工場建設に伴うもので、東三坊坊間小路西側溝などが検出され、この溝から木製人形と和銅開珎が出土した。調査10は工場建設に伴うもので、縄文時代から弥生時代の土器が多量に含む溝・流路、長岡京期の掘立柱建物・柵・東三坊大路などが検出された。調査11は河川改修に伴うもので、縄文時代の土坑、弥生時代の溝、長岡京期の掘立柱建物・東三坊大路西側溝・三条条間南小路などが検出された。調査12は河川改修に伴うもので、縄文時代の自然堆積、弥生時代の落込み、長岡京期の掘立柱建物・東三坊大路・三条条間南小路などが検出された。調査13は工場建設に伴うもので、縄文時代晩期の流路、弥生時代の湿地・溝、古墳時代から飛鳥時代の溝、長岡京期の建物群などが検出された。調査14は工場建設に伴うもので、長岡京期の掘立柱建物・三条条間小路などが検出された。調査15は宅地開発に伴うもので、鎌倉時代から室町時代の耕作溝などが検出された。

3. 遺 構

(1) 1区

1) 基本層序 (図6)

地表の標高は12m前後である。地表より現代耕作土が厚さ0.1~0.3m、中世から近世の耕作土が厚さ0.3~0.4mである。その下が地山層となり、上面の標高は11.45m前後である。検出した遺構は地山面を掘り込む。地山は主に黄褐色シルトであるが、調査区西端で暗灰色シルトとなる。

2) 遺 構 (図7、図版1-1)

検出した遺構は古墳時代から中世に及ぶと考えられるが、大半の遺構から遺物が出土せず、出土したものもほとんどが少量・小片であった。そのため埋土や検出状況から時期を推定した遺構が多い。

古墳時代

流路17 (図8、図版2-1) 調査区西側で検出した。検出規模は、幅約8m、長さ約3m、深さ0.2~0.5mを測る。方向は北東から南西であり、調査区外へ延びる。埋土は、黄褐色から褐灰色のシルトと砂層が互層に堆積する。古墳時代の遺物が出土した。

溝12 調査区中央部で検出した溝である。検出規模は、幅0.4~0.7m、長さ約6m、深さ約0.3mを測る。方向は北西から南東であり、調査区外に延びる。埋土は暗灰黄色シルトである。遺物は出土しなかった。

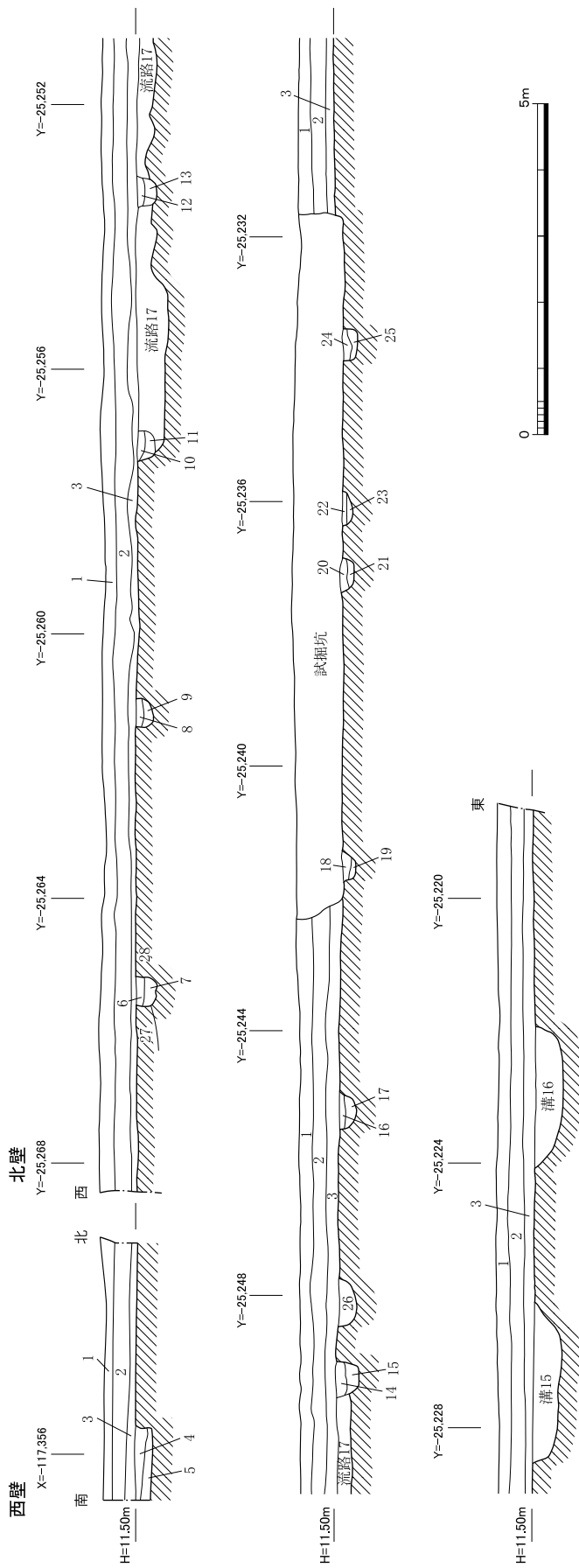
長岡京期

溝15 (図9、図版2-2) 調査区東側で検出した南北溝で調査区外に延びる。検出規模は、幅2.5m前後、長さ約4.5m、深さ約0.4mを測る。埋土は灰色シルトである。溝の中央に東四坊坊間小路東側溝の推定心¹⁾が通る。奈良時代から長岡京期の遺物が出土した。

溝16 (図9、図版2-2) 調査区東側で検出した南北溝である。検出規模は、幅1.6~2.4m、長さ約4.4m、深さ約0.4mを測る。埋土は3層に分層でき、上層は明褐色シルトが混じり、中層・下層は灰色シルトである。上層は後世の埋土が混じった層と考えられる。上層では中世の遺物が、中層・下層では奈良時代から長岡京期の遺物が出土した。

表2 遺構概要表

時 代	遺 構	
	1 区	2 区
古墳時代	流路17、溝12	土坑211
長岡京期	溝15・16、柱穴24・25	
平安時代~中世	耕作溝多数	耕作溝多数



- 1 現代耕作土
- 2 2.5Y5/2暗灰黄色シルト (耕作土)
- 3 2.5Y4/2暗黄灰色シルト (溝1)
- 4 2.5Y5/1黄灰色シルト (溝2)
- 5 5Y5/1灰色シルト (溝3)
- 6 10YR6/2灰黄褐色シルト
- 7 2.5Y4/2暗灰黄~5Y4/2灰オリーブ色シルト
- 8 10YR6/2暗黄褐色シルト
- 9 2.5Y4/1黄灰色シルト
- 10 10YR6/2灰黄褐色シルト (溝4)
- 11 2.5Y4/1黄灰色シルト (溝5)
- 12 10YR6/2暗黄褐色シルト (溝6)
- 13 2.5Y4/1黄灰~5Y5/2灰オリーブ色シルト (溝7)
- 14 10YR4/1暗灰色シルト (溝8)
- 15 2.5Y4/2~5/1暗灰黄色シルト (溝9)
- 16 10YR4/1暗灰色シルト (溝10)
- 17 2.5Y4/1黄灰~2.5Y5/2暗灰黄色シルト (溝11)
- 18 2.5Y5/1黄灰色シルト 混7.5YR5/6明褐色シルト (溝12)
- 19 2.5Y4/1黄灰色シルト (溝13)
- 20 5Y5/1灰色シルト (溝14)
- 21 5Y4/1灰色シルト (溝15)
- 22 5Y5/1灰色シルト (溝16)
- 23 5Y5/1灰色粘質土 (溝17)
- 24 5Y5/1灰色シルト (溝18)
- 25 2.5Y5/2暗灰黄色粘質土 (溝19)
- 26 10YR4/1暗灰~2.5Y5/2暗灰黄色シルト (溝20)
- 27 N3暗灰色~5Y5/1灰色シルト (溝21)
- 28 2.5Y5/1黄褐~10Y5/1灰色シルト (溝22)

図6 1区西壁・北壁断面図 (1:100)

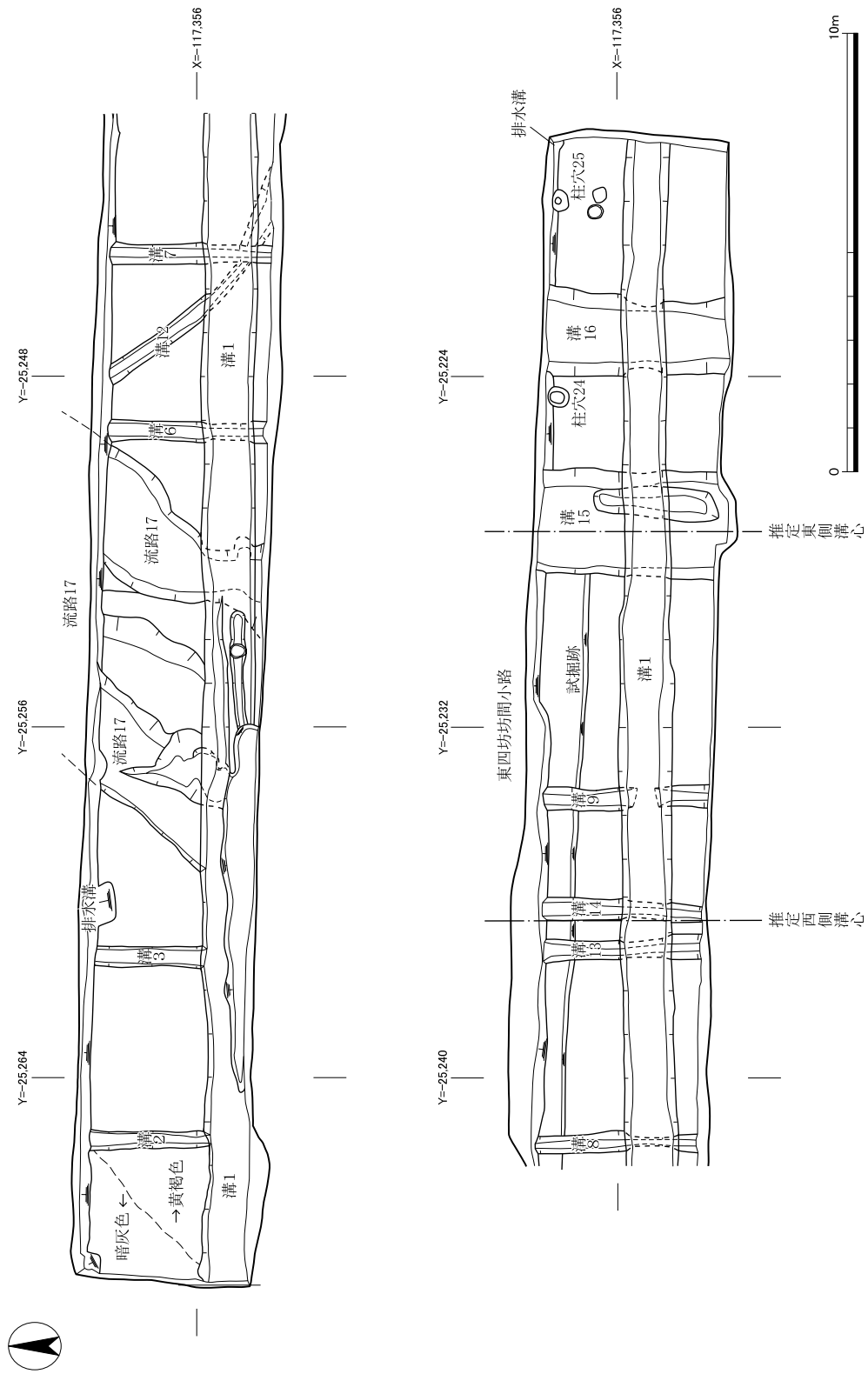


図7 1区遺構平面図 (1:150)

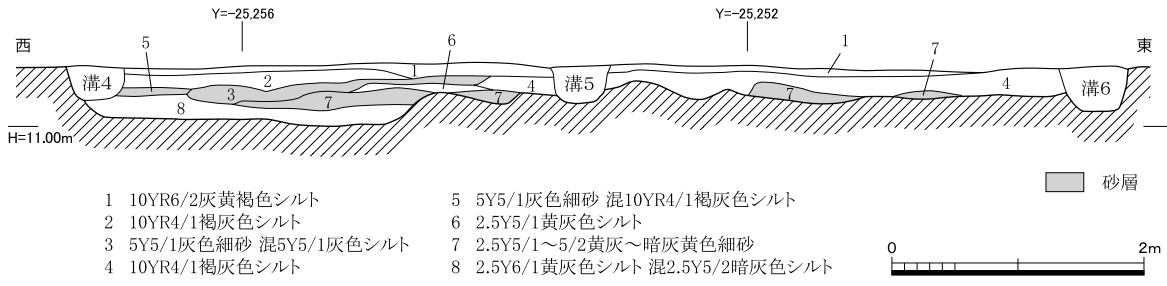


図8 流路17断面図 (1:60)

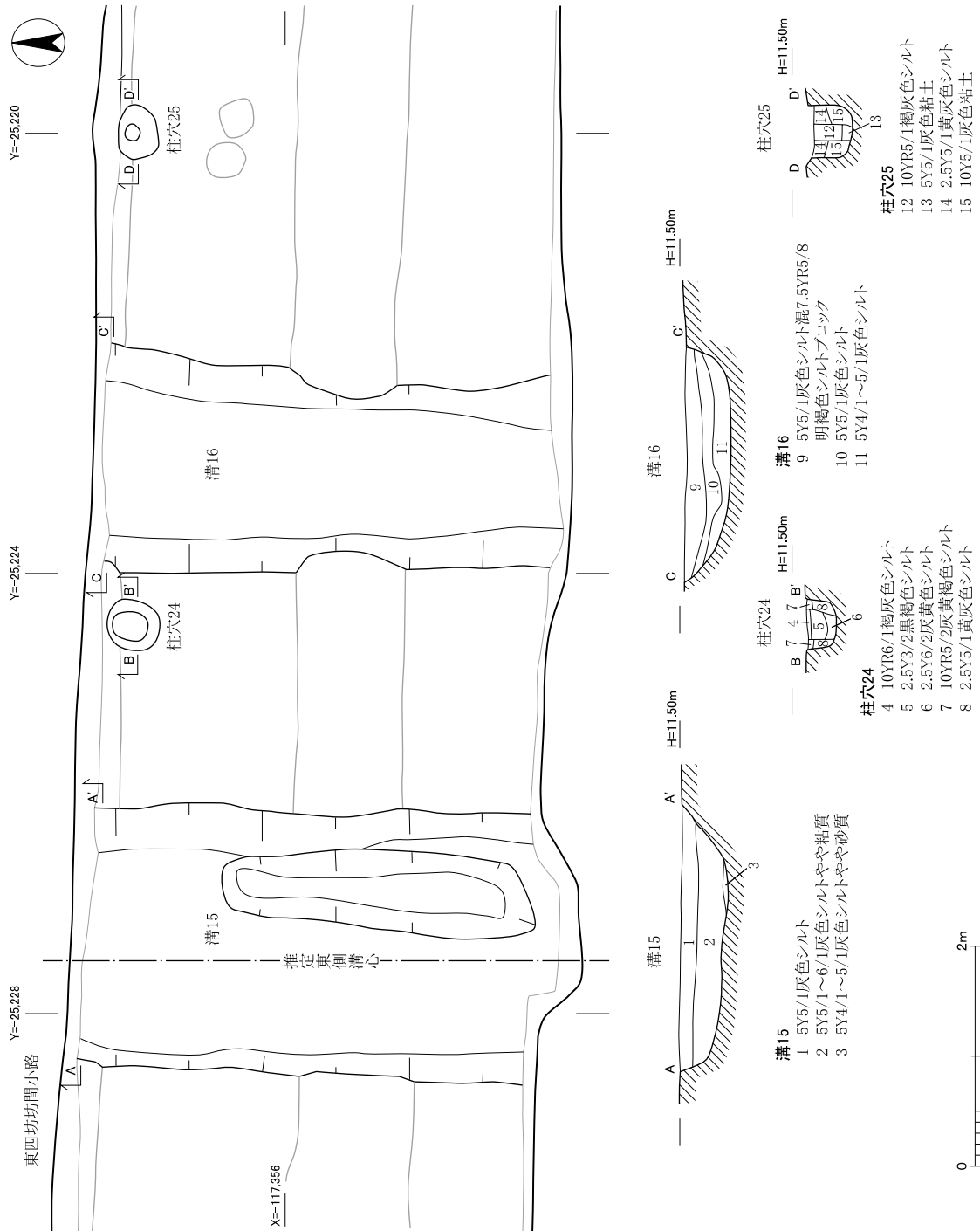


図9 溝15・16、柱穴24・25実測図 (1:60)

柱穴24(図9) 調査区東側で検出した。検出規模は、径0.45～0.5m、深さ約0.3mを測る。掘形の形状は楕円形であり、径0.25～0.3mの柱痕跡がある。埋土は黒褐色から黄褐色のシルトが主体である。軒丸瓦が1点のみ出土した。

柱穴25(図9) 調査区東側で検出した。検出規模は、径0.35～0.5m、深さ約0.4mを測る。掘形の形状は楕円形であり、径0.15mの柱痕跡がある。埋土は灰色粘土と褐灰色シルトが主体である。奈良時代から長岡京期の遺物が出土した。

平安時代から中世

耕作溝 調査区全域で耕作溝と考えられる溝を検出した。いずれの溝も調査区外へ延びる。南北溝は10条(溝2～9・13・14)あり、それらを切り込んで東西溝を1条(溝1)を検出した。時期は、平安時代から中世と考えられ、東西溝が南北溝より新しい。

(2) 2区

1) 基本層序(図10)

地表の標高は11.8m前後である。地表より現代耕作土が厚さ0.1～0.2m、中世から近世の耕作土が厚さ0.3～0.5mである。その下が地山層となり、上面の標高は11.1～11.2mである。検出した遺構は地山面を掘り込む。地山は調査区西半が暗灰色シルト、東半が黄褐色シルトである。

2) 遺構(図11、図版1-2)

検出した遺構は古墳時代と考えられる土坑が1基ある。その他は耕作溝と考えられる遺構を多く検出した。1区と同様に遺構の大半は遺物が出土しなかった。出土したのも少量・小片がほと

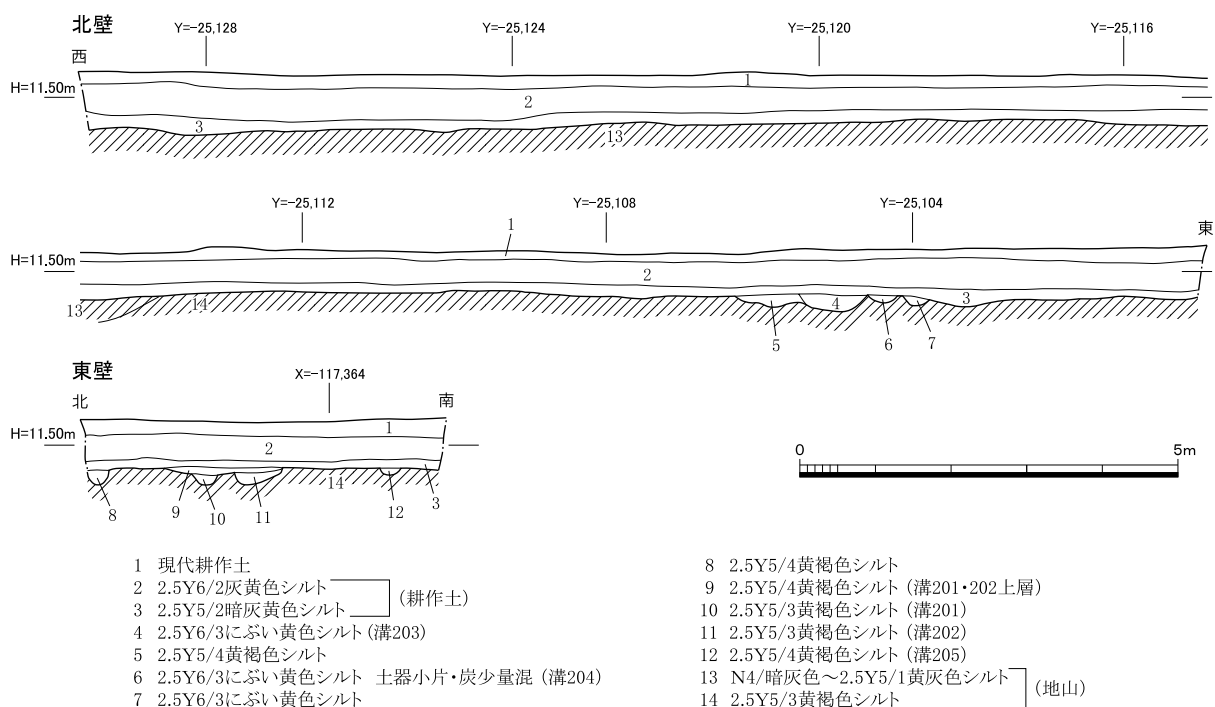


図10 2区北壁・東壁断面図(1:100)

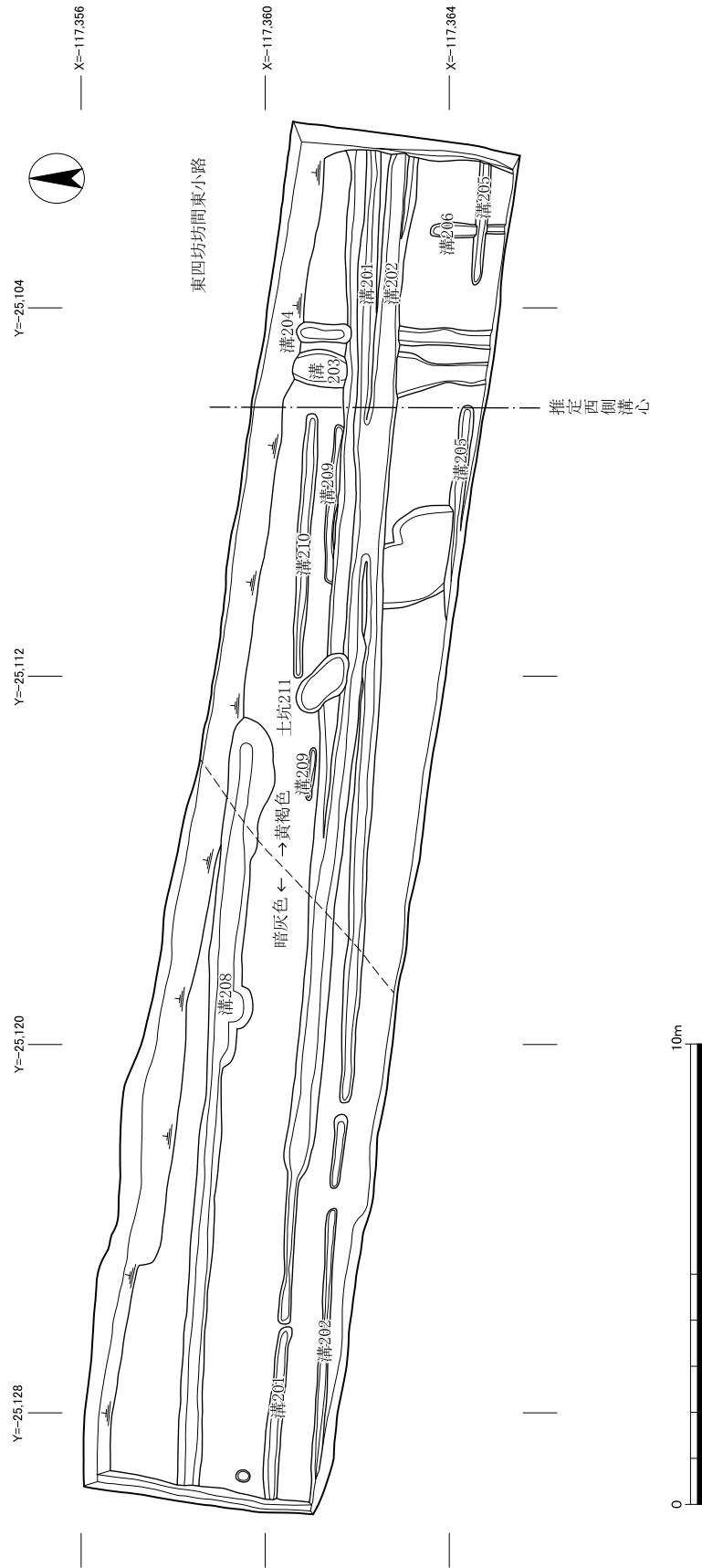


图11 2区遺構平面图 (1:150)

んどで、埋土や検出状況から時期を推定した遺構が多い。

古墳時代

土坑211 調査区中央部で検出した。検出規模は、長軸約1.5m、短軸約0.8m、深さ約0.25mを測る。形状は細長い楕円形を呈する。埋土は暗灰黄色シルトである。用途は不明、古墳時代の土師器が出土した。

平安時代から中世

耕作溝 調査区全域で耕作溝を検出した。いずれの溝も調査区外へ延びる。南北溝は溝203など3条（溝203・204・206）あり、それらを切り込んで東西溝を6条（溝201・202・205・208～210）検出した。1区では南北溝を多く検出したが、2区は東西溝が多い。時期は、平安時代から中世と考えられ、東西溝が南北溝より新しい。

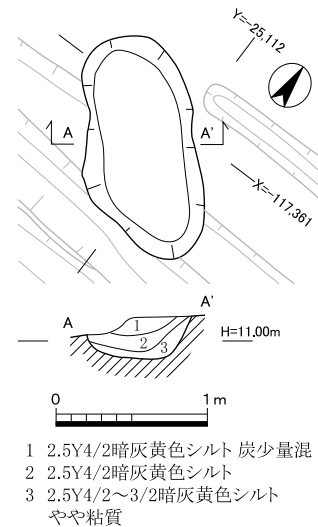


図12 土坑211実測図
(1:50)

註

- 1) 条坊位置は「長岡京条坊復原図」（『年報 都城10』財団法人向日市埋蔵文化財センター 1999年付録）に準じた。

4. 遺 物

出土した遺物は、1区と2区を合わせて整理箱で6箱であり、内訳は土器・瓦類が5箱、木製品などが1箱である。遺物概要表は1区と2区をまとめたが、報告は各区個別で記述する。遺物の時期・年代については『京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究¹⁾』に準じた。

表3 遺物概要表

時 代	内 容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
弥生時代	弥生土器				
古墳時代	土師器、須恵器				
奈良時代 ～長岡京期	土師器、須恵器、瓦類、木製品、種子		土師器5点、須恵器1点、軒丸瓦1点		
平安時代 ～鎌倉時代	土師器、須恵器、瓦器、輸入磁器、種子		土師器1点、瓦器2点		
江戸時代	土師器、染付磁器、施釉陶磁器、瓦類				
合 計		7箱	10点（1箱）	0箱	6箱

※ コンテナ箱数の合計は、整理後、Aランクの遺物を抽出したため、出土時より1箱多くなっている。

(1) 1区

1) 遺物の概要

出土した遺物は整理箱で4箱であり、内訳は土器類・瓦類が3箱、木製品などが1箱である。内容は土器類がほとんどである。奈良時代から長岡京期の遺物が多く、土師器杯皿類・高杯・甕、須恵器杯・蓋、軒丸瓦・平瓦がある。次に平安時代から鎌倉時代の遺物が多く、土師器皿、須恵器鉢・甕、瓦器椀、輸入磁器椀がある。古墳時代、江戸時代の遺物は少量である。古墳時代の遺物には土師器甕、須恵器蓋がある。江戸時代の遺物には土師器皿、染付磁器椀、施釉陶器椀、平瓦がある。木質遺物には、耕作溝から出土したウリの種子、溝15・16から出土した漆器小片・木片・モモの種子がある。

2) 土器類 (図13、図版2-3)

出土した土器類は大半が小片であるため、図示できるものは少数にとどまる。

1は須恵器杯である。体部は外上方へ立ち上がり、口縁端部は丸く収める。溝15から出土した。2は土師器甕である。口縁部は体部から屈曲して外反して開く。体部外面の調整縦方向のハケ目が顕著である。柱穴25から出土した。3は土師器高杯裾部である。端部は小さく下方に丸く突出する。内外面にハケ目を施す。溝16から出土した。1～3の時期は奈良時代から長岡京期に収まる。4は土師器皿である。外面にヘラケズリを施す。溝15から出土した。5・6は土師器杯である。口縁端部がわずかに丸く内面に突出する。外面にヘラケズリを施す。溝16から出土した。4～6の時期は長岡京期に収まる。

7は土師器皿である。小振りな作りであり、底部から屈曲して体部が付き、外反する。8は瓦器

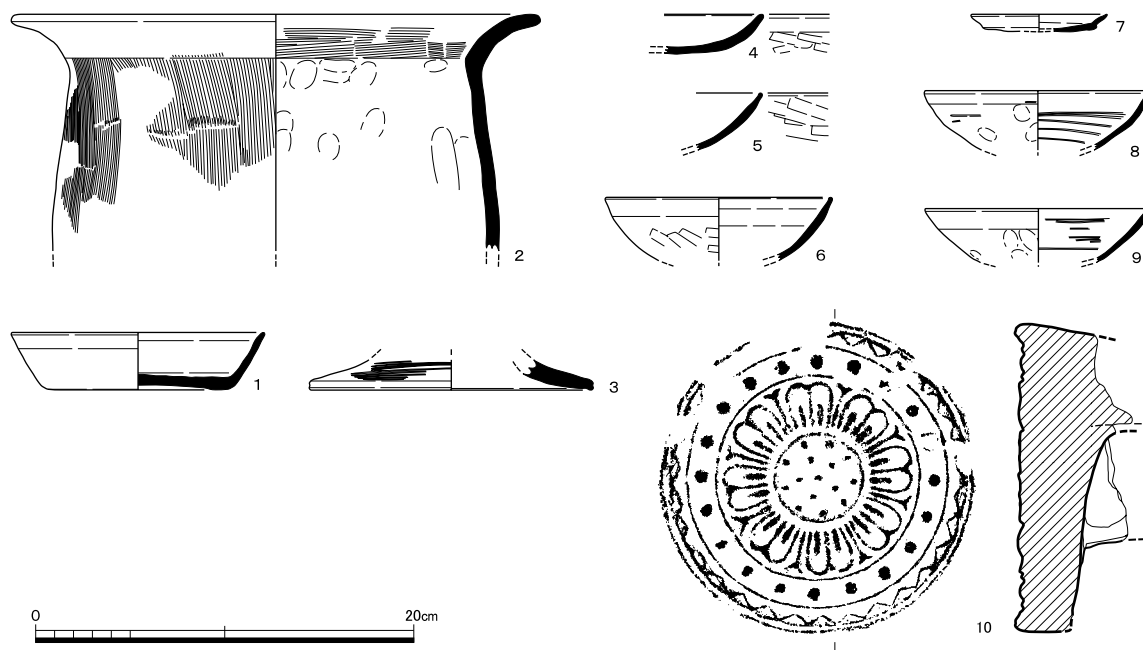


図13 1区出土遺物実測図 (1:4)

椀である。口縁端部は丸く収める。内面にはヘラミガキの暗文が施される。9も瓦器椀である。口縁端部はつまみ、丸く収める。内面はヘラミガキを施すが暗文は目立たない。7～9は溝16の上層から出土した。時期は京都Ⅶ期に比定でき、鎌倉時代である。

3) 瓦類 (図12、図版2-3)

軒丸瓦1点、平瓦が少数、近世瓦が数点出土した。

10は複弁八葉蓮華文軒丸瓦である。中房は蓮子を1+5+9個配する。花卉は複弁と間弁からなる。外区は圏線に挟まれた珠文帯と鋸歯文を配する外縁がある。珠文は20個配する。平城宮6301B式である。柱穴24から出土した。

(2) 2区

1) 遺物の概要

出土した遺物は整理箱で土器類・瓦類が2箱である。内訳はほとんどが土器類であり、瓦類は江戸時代のものが1点のみである。長岡京期の遺物が多く、次に平安時代から鎌倉時代の遺物が多い。奈良時代から長岡京期の遺物には土師器杯皿類、須恵器蓋などがある。平安時代から鎌倉時代の遺物には土師器皿・甕、須恵器蓋・甕、瓦器椀、輸入磁器椀がある。古墳時代、江戸時代の遺物は少量である。古墳時代の遺物には土師器、須恵器蓋などがある。江戸時代の遺物には平瓦などがある。その他に弥生時代の弥生土器甕が1点出土した。出土遺物はほとんどが小片であるため図示できるものは認められなかった。

註

- 1) 小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要』第3号 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1996年

750頃	840頃	930頃	1010頃	1080~90頃	1180頃	1270頃	1360頃	1440頃	1500頃	1580~90頃	1660頃	1740年代頃	1820年代頃
I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII	IX	X	XI	XII	XIII	XIV
古 中 新	古 中 新	古 中 新	古 中 新	古 中 新	古 中 新	古 中 新	古 中 新	古 中 新	古 中 新	古 中 新	古 中 新	古 中 新	古 中 新

5. まとめ

検出した主な遺構について述べる。

1区 流路17は砂とシルトが互層に堆積し、流れがあったことを示す。時期は古墳時代である。溝12は遺物が出土しなかったが、溝の方向が長岡京条坊と異なっており、層序や埋土などの検出状況から古墳時代の溝と考える。長岡京期の遺構は、溝15・16、柱穴24・25である。溝15・16は、平安時代から中世と考える耕作溝などと比較すると、幅や深さなどの規模、埋土の状況など、明らかに違いが認められる。東四坊坊間小路東側溝推定心が溝15に重なり、溝15は東四坊坊間小路東側溝と考えられる。溝16は溝15と心々間で約4.5m東の宅地内に位置することから、内溝の可能性はある。柱穴24と柱穴25も宅地内に位置し、柱穴24は町の区画に関連する柵などの建物、柱穴25は調査区外北側に展開する建物などの一部である可能性がある。小路西側溝推定心の位置でも南北方向の溝14を検出したが、規模や埋土などの状況から平安時代から中世の耕作溝と考えるが、西側溝である可能性が残る。

2区 主な遺構は土坑211のみであり、時期は出土遺物から古墳時代と考えられる。東四坊坊間東小路西側溝推定心の位置近くで検出した南北溝203は、規模や埋土などの状況から平安時代から中世の耕作溝と考えるが、小路西側溝である可能性が残る。

長岡京期の遺構を検出した地山面上位には、1区・2区壁の精査により、平安時代から中世の遺物を含む耕作土が堆積し、さらに近世の遺物や竹樋の暗渠が認められる耕作土が堆積し、現代の耕作土につながる。調査地周辺は、長岡京廃都後、しだいに耕作地になっていったと考えられる。

圖 版



1 1区全景（東から）



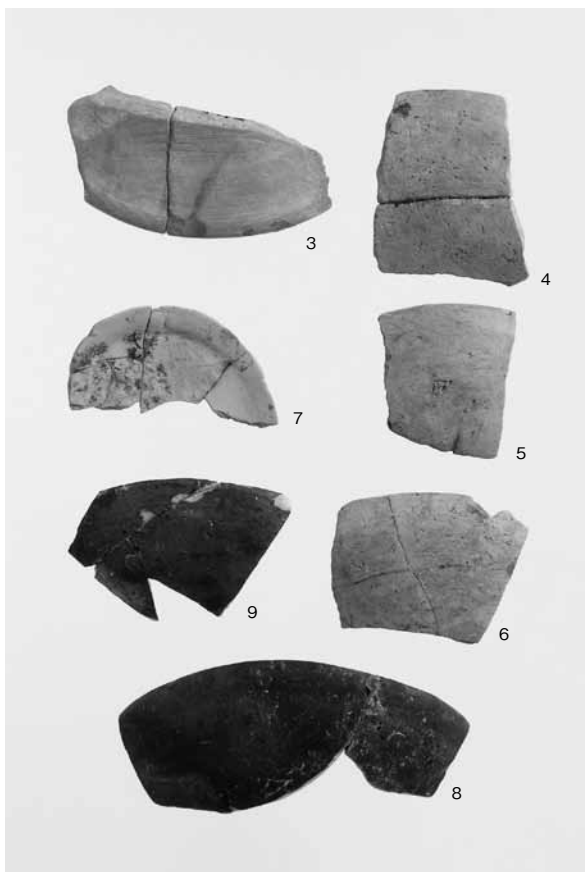
2 2区全景（西から）



1 1区流路17 (北東から)



2 1区溝15・16 (北東から)



3 1区出土遺物



10

報 告 書 抄 録

ふりがな	ながおかきょうさきょうにじょうしぼうご・じゅうにちょうあと							
書名	長岡京左京二条四坊五・十二町跡							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告							
シリーズ番号	2014-5							
編著者名	布川豊治							
編集機関	公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2014年12月26日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ながおかきょうあと 長岡京跡	きょうとしふしみく 京都市伏見区 こがにしでちょう 久我西出町 ほかにない 1-28他地内	26100	3	34度 56分 30秒	135度 43分 25秒	2014年8月 4日～2014 年9月10日	350㎡	工場建設 工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
長岡京跡	都城跡	古墳時代	流路、溝、土坑	土師器、須恵器		東四坊坊間小路東側溝と内溝と考えられる溝を検出した。		
		長岡京期	溝、柱穴	土師器、須恵器、瓦類				
		平安時代 ～中世	耕作溝	土師器、須恵器、瓦器、 輸入磁器				

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2014-5
長岡京左京二条四坊五・十二町跡

発行日 2014年12月26日

編集行 公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1
〒602-8435 TEL 075-415-0521
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町298番地
〒604-0093 TEL 075-256-0961